

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：32508

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00583

研究課題名(和文) 近現代日本語におけるポライトネス意識の通時的変化の研究：敬語と授受表現をめぐって

研究課題名(英文) An investigation of honorifics and benefactives in modern Japanese: how people's awareness of politeness has changed in the process of gradual decrease in deference

研究代表者

滝浦 真人 (Takiura, Masato)

放送大学・教養学部・教授

研究者番号：90248998

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：過去150年ほどの日本語に表れた人々のポライトネス意識の変遷を、敬語および授受動詞(の補助動詞用法[ベネファクティブ])に探った。いずれにおいても、日本語の敬語的な語が宿命的に被る「敬意漸減」の作用が見られ、ベネファクティブでは他者指向的な「テクダサル」から自己呈示的な「テイタダク」への大きなシフトが、敬語でも従来型の3分類的な他者指向的な類型から5分類で加えられた自己呈示的な(へりくだりの)類型へのシフトが推定された。そこから、人々のポライトネス意識も、他者指向から自己呈示への流れの中にあるものと考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「「させていただく」症候群」と言われるような、特定の形式の偏重とも見えるような現象があるが、本研究の成果によって、それは一時の流行といったことではなく、ベネファクティブや敬語全般における「敬意漸減」の作用の結果、ある種の必然として生じている結果であることが推定された。ベネファクティブでは「してあげる/さしあげる」や「させていただきます(ください)」といった形式が使いにくくなったこと、敬語では従来型の尊敬語や謙譲語よりも、自己謙遜的な丁寧語が選好されていることが要因となり、雪崩を打つように「させていただく」へと流れ込んでいると考えられた。このことは同時にポライトネス意識の表れでもあると結論された。

研究成果の概要(英文)：Honorifics and benefactives in modern Japanese were investigated with corpora. The results revealed that the law of gradual decrease in deference affected both of them: in benefactives a major shift was observed from deferential '-te kudasaru' to presentational '-te itadaku', and in honorifics a substantial change in people's preferences was presumed. We discussed that there is a bulk flow in people's consciousness of politeness from 'deference' to 'demeanor' after the terminology of Erving Goffman.

研究分野：語用論、日本語学、イン/ポライトネス論

キーワード：ポライトネス ベネファクティブ 敬語 敬意漸減 表敬と品行

1. 研究開始当初の背景

敬語という顕著な対人関係表現専用の体系を有することの反映として、日本語のポライトネス表現は、基本的に敬語を中心とする専用手段によって担われてきた。同様の専用手段としては呼称も有力だが、本研究が対象とする期間は呼称が全般的に背景化した「標準語」選定以降の期間でもあるため、日本語のポライトネスは敬語を軸に展開してきたと言ってよい。一方、いわゆる「やりもらい」の授受動詞も日本語史に長く存在しているが、補助動詞用法のとりわけ「てくださる／ていただく」等の敬語形用法は、比較的後の時代になって発生した。語彙ごとの発生時期にもかなりの開きがあり、たとえば「ていただく」の出現は「てくださる」より3世紀も後である。授受表現が本来、恩恵の移動を表すことからすれば、恩恵関係が抽象化された文脈や実質的にない文脈で使用される補助動詞用法は、行為の方向性を擬似的に見なされた恩恵関係として表現するという半ば転用手段として用いられていることになり、この点でポライトネス的指向性を初めから強く持っていると言える。こうした点で、敬語と授受表現のポライトネスは、異同の両面ともに興味深い。

日本社会との関係に目を向けると、この百年ほどの期間に日本は、社会における人間関係秩序の変容という大きな転換を経験している。戦前・戦中の垂直方向の言語秩序は、敗戦を機に水平方向の「相互尊重」へと比重を移動させた（「これからの敬語」1952年）。さらには、それから半世紀ほどが経過するに至り、敬語などの遠隔的で“敬避的”ポライトネスから近接的な“共感的”ポライトネスへのシフトを裏付ける新たな表現の広まりがある。敬語と授受表現の間でも、敬避的な間接化を旨とする敬語よりも、相互行為の参与者同士の関わり合いを直に表現する授受表現の方が、より近接的なニュアンスを帯びる。こうした変容の消息については、少し前から社会言語学的観点による研究があり、とりわけ井上史雄は、「コミュニケーションの民主化」について述べ、上下秩序から親疎秩序へのシフトと、それに伴って敬語から授受表現へのシフトが起こりつつあると指摘している（井上1999、井上他2012）。その上で本研究は、上下秩序的な敬語から親疎秩序的な敬語へ、敬語から授受表現へ、さらには授受表現内部での各シフトを、言語使用者の意識とその反映としての実際の使用面を捉えて分析・考察する。研究の核心をなす問いとして述べ直すなら、「近代日本社会における人間関係秩序の変化は、人々のポライトネス意識と言語使用をどう変えた／変えつつあるか？」となる。

2. 研究の目的

本研究は、日本社会の近代における人間関係秩序の変化が、人々のポライトネス意識と言語使用をどう変えてきたか？という問題意識のもとで、現在までの百年ほどを対象として、実証的方法を用いながら、日本語におけるポライトネス基盤の変容を探ろうとする。日本語のポライトネス基盤には、人間関係認識や恩恵関係認識の表現装置である敬語と授受表現の関わりが大きい。ため、本研究でもこの二者に着目する。それらを通時的な相対で検討するために、人々の表現選好における変化を探っていく。具体的には、敬語から授受表現への漸次的なシフトや、授受表現内部で各語彙間でのシフトが、いつ・どのように生じてきたかを調査する。それによってポライトネス基盤の変容を立体的に捉えることが可能となる。敬語や授受表現に関する研究は主に日本国内で（日本語で）なされてきた感が強いが、ポライトネスの枠組みを導入することで、近代化とポスト・モダン社会への社会的変化が引き起こすポライトネス基盤の変容という問題系として、通言語的・通文化的観点から考察することが可能となる。世界のポライトネス研究に対する日本語からの貢献を可能にするこの点は、本研究の大きな特長であると考えられる。

3. 研究の方法

本研究の方法としては、大きく2つの部門の計4つの営為から成る。まず、授受動詞の補助動詞用法（以下、ベネファクティブ）に関し、以下の3つの活動を行う。第一に、3系列の非敬語／敬語形合わせて計7語の出現時期を、文献資料や歴史コーパスなどから推定して「日本語ベネファクティブ年表」として作成し、以後の様々なシフトを検討する際の基盤とする。次に、敬語における敬意や授受表現における恩恵などの「敬意」的なものが使われるうちに摩耗しつつには代替わりを引き起こす「敬意漸減・逡減」の現象について、完全に等閑視された戦後70年の空白を埋めるべく、包括的な把握を試みつつ、各ベネファクティブや敬語に生じた敬意漸減現象を具体的に記述してゆく。そして最後に、モラウ系敬語形ベネファクティブのバリエーションである「させていただく」への他系からの雪崩れ込み的な様相を呈している現状に対して、語用論的な解釈と人々のポライトネス意識という観点からの説明を与えることを試みる。コーパス調査では、一定数のサンプル表現形を選定し、複数のコーパスから抽出・比較する作業を重ねてゆく。用例の抽出と検討によって、その表現形に対する選好の度合いを分析する。シフトが生じた順ま

で含めて跡づけることを目指す。ソースとしては、『日本語歴史コーパス明治・大正編』『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語話し言葉コーパス』(国立国語研究所)のほか、著作権フリーの文章を集めた『青空文庫』も活用する。

敬語に関しても、近代において「敬意漸減」がどのように作用してきているかを調査し、そこから人々のポライトネス意識を推定してゆく。とりわけ、「敬語の5分類」で分離独立させられた類型である「丁寧語」と「美化語」に勢いがある現状について、その意味するところに解釈を与えることを目指す。

4. 研究成果

「近現代日本語におけるポライトネス意識の通時的変化の研究:敬語と授受表現をめぐって」との研究課題の下、大きく2つの方向で研究を進めた成果の概要から述べる。1つは、ベネファクティブをめぐって、その変化の主たる動因が敬意漸減現象にあるとの認識に立ち、各ベネファクティブの変化の様相を複数のコーパス調査結果によって検討して考察した。その結果、日本語敬語における“敬意のインフレーション”が現在まで続いていることの典型的な表れとして描き出すことに成功した。もう1つは、近代における敬語の用法の変化について、大きな流れとして登場人物間の敬語から聞き手目当ての対者敬語へのシフトがあるとの観点から検討した。今世紀に入ってから公式に採用された「敬語の5分類」のうちに、動作主や受容者など他者を指向するタイプの敬語と、そうした他者が少なくとも直接には想定されない自己呈示的な敬語の2類型があるが、それらは各々、社会学者ゴフマンの「表敬」と「品行」の概念に対応させて考えることが可能となるとの洞察が得られた。これによれば上述の変化は、従来型の“表敬の敬語”から、「丁寧語/美化語」という“品行の敬語”へのシフトと解釈することができる。

これら2つの方向性を統合する大きな動因として、日本語の敬語的なものが宿命的に被ることになる「敬意漸減」の働きがあると考えられた。ベネファクティブに生じている変化についても、「くださる」「さしあげる」のような他者指向のタイプが敬意漸減して、自己呈示的な「いただく」への大規模なシフトであると解釈できる。敬語における自己呈示的な“品行”の敬語への選好のシフトについても、敬意漸減の大きな方向性に合致するものであると論じた。そしてこれらの現象は、現在の日本における敬語状況と人々の基本的なポライトネス意識の表れとしても捉えられた。

本研究の研究成果発表としては、分担者および塩田、滝島の両協力者を含めたメンバーによる研究打合せを定期的に行い、その成果を学術集会「ベネファクティブとポライトネス研究集会」(2回開催)において発表した。また、海外への発信として「International Pragmatics Association Conference 2019」において、「東アジアの言語における近代のポライトネス変化」をテーマとしたパネルを立て、代表者と分担者が発表した。このほか、椎名分担者は本研究による成果を含む知見を、「「させていただく」という問題系:歴史社会語用論的調査と考察」との学位論文(放送大学)としてまとめた。本研究における最大の成果としては、ベネファクティブ「させていただく」をめぐるとの論集『「させていただく」大研究』を刊行できたことである。上述の研究集会で講演や発表を行った(行う予定だった)論者たちの論考を集め、そこに共編者として本研究の責任者と分担者による概観論文と共著論文を付した論文集として刊行した。各論者とは最終稿に至るまでの過程で編者と活発な意見交換を行って、共通の研究成果としての質の担保を図った。

研究期間全体を通じた成果として、研究課題名「近現代日本語におけるポライトネス意識の通時的変化の研究:敬語と授受表現をめぐって」にあるとおり、「近現代日本語」において人々の「ポライトネス意識」がどのように変化してきたかを、「敬語」や「授受表現」のコーパス調査などから明らかにするという課題を、満足のいく水準で遂行できたものと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Masato Takiura	4. 巻 1
2. 論文標題 Intersection of traditional Japanese honorific theories and Western politeness theories	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Yoshiyuki Asahi, Mayumi Usami, Fumio Inoue (Eds.) Handbook of Japanese Sociolinguistics	6. 最初と最後の頁 327-354
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 滝浦真人	4. 巻 41-3
2. 論文標題 日本語の敬語と語用論 敬語の語用論はタメ語の語用論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 22-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Michi Shiina	4. 巻 1
2. 論文標題 Strategies of Power and Distance in the Trial Record of King Charles I: Combinations of Personal Pronouns and Modality in Speech Acts	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Yoko Iyeyri, Jeremy Smith, and Hiroshi Yadomi (eds.) Variational studies on pronominal forms in the history of English	6. 最初と最後の頁 63-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masato Takiura	4. 巻 23
2. 論文標題 A View of the Development of Im/Politeness Theories from an East Asian Language with Honorification	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Studies in Pragmatics	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 滝浦真人・椎名美智	4. 巻 1
2. 論文標題 「させていただく」はなぜ一人勝ちしたか？ ベネファクティブの変遷に見る敬意漸減プロセス	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 「させていただく」大研究	6. 最初と最後の頁 237-276
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 滝浦真人	4. 巻 1
2. 論文標題 敬意漸減 すり減って止まない敬意が引き起こすこと	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 「させていただく」大研究	6. 最初と最後の頁 57-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 椎名美智	4. 巻 54-10
2. 論文標題 歴史語用論から見る「させていただく」の現代語性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 113-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 滝浦真人	4. 巻 54-10
2. 論文標題 すり減る敬意と日本語の現在	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 103-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 滝浦真人	4. 巻 1
2. 論文標題 なぜいま敬語は『5分類』になったのか? 日本人の敬語意識に起こっていること	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近藤泰弘、澤田淳編『敬語の文法と語用論』開拓社	6. 最初と最後の頁 59-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 滝浦真人	4. 巻 1
2. 論文標題 東アジアの敬語論 語用論的対照研究へ向かって (滝浦 2017「敬語の対照研究への新視点」『日本語学』、滝浦 2020「敬語」『日本語学入門』との重複あり)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 趙 華敏 編『日語語用学研究』北京: 外語教学研究出版社	6. 最初と最後の頁 129-144
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 椎名美智・滝浦真人	4. 巻 3
2. 論文標題 薄幸のベネファクティブ「てさしあげる」のストーリー 敬意漸減と敬意のナルシズム	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝編『動的語用論の構築へ向けて』開拓社	6. 最初と最後の頁 204-240
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 滝浦真人	4. 巻 40(2)
2. 論文標題 「国語に関する世論調査」に見る敬語意識 言葉と行為のはざまに見えるもの	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 48-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 椎名美智	4. 巻 37
2. 論文標題 悪態はなぜ多様性に富むのか？ 初期近代英語期におけるインポライトネス	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近代英語研究	6. 最初と最後の頁 43-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 滝浦真人	4. 巻 5
2. 論文標題 この地でポライトネスを考えることの意味を考える	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Human Linguistics Review	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 滝浦真人	4. 巻 -
2. 論文標題 対人語用論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 加藤重広、澤田淳編『はじめての語用論』研究社	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 椎名美智	4. 巻 -
2. 論文標題 歴史語用論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 加藤重広、澤田淳編『はじめての語用論』研究社	6. 最初と最後の頁 194-210
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 滝浦真人	4. 巻 3
2. 論文標題 「ボライトネスの原理・原則」と日本語ベネファクティブの敬意漸減	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 加藤重広・滝浦真人編『日本語語用論フォーラム』	6. 最初と最後の頁 75-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sachiko Kiyama, Youngmi Choung, and Masato Takiura	4. 巻 -
2. 論文標題 Multiple factors act differently in decision-making in the East Asian region: Assessing methods of self-construal using classification tree analysis	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Cross Cultural Psychology (印刷中)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計18件 (うち招待講演 10件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 椎名美智
2. 発表標題 語用論的文体論の試み インボライトな人々
3. 学会等名 京都府立大学英文学会・現代英語談話会共催 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 椎名美智
2. 発表標題 チャールズ一世の裁判記録における時空間体系
3. 学会等名 近代英語協会 第39回大会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 滝浦真人
2. 発表標題 [ディスカッション] 多層的な日本語の語用論と東アジアの語用論 (シンポジウム「語用論的方言学への招待」小林隆、中西太郎、津田智史、椎名渉子との共同発表)
3. 学会等名 日本語用論学会第24回大会@オンライン、2021年12月19日
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 滝浦真人
2. 発表標題 近現代日本語における授受表現と敬語の語用論 聞き手意識による変容を捉える (シンポジウム「語用論と日本語研究」青木博史、加藤重広、森勇太、吉田永弘との共同発表)
3. 学会等名 日本語学会2021年度秋季大会@オンライン、2021年10月31日(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Masato Takiura
2. 発表標題 A View of the Development of Im/Politeness Theories from an East Asian Language with Honorification.
3. 学会等名 Keynote speech at 17th China Pragmatics Association @online, 17 Oct, 2021 (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Michi Shiina
2. 発表標題 Spatio-Temporal Systems in an Early Modern Courtroom: A Case from the Trial Record of King Charles I
3. 学会等名 Co-presentation with Minako Nakayasu at Poznan Linguistic Meeting @Adam Mickiewicz University, Poland (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 滝浦真人
2. 発表標題 日本語にイン/ポライトネス研究が必要なわけ “異議申し立て”としてのイン/ポライトネス研究に事寄せて
3. 学会等名 日本語用論学会(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 椎名美智、滝浦真人、加藤重広
2. 発表標題 カルペパーとホーの『新しい語用論の世界 英語からのアプローチ』:この本は、どこがどう新しいのか?
3. 学会等名 日本語用論学会関東地区研究会(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 TAKIURA, Masato
2. 発表標題 Degradation of honorifics and increase of '0-consciousness' in conversation: What has shifted in the way people communicate? (In a panel: Diachrony of politeness in East Asia in modern times, organized by Masato Takiura and Michi Shiina)
3. 学会等名 16th International Pragmatics Conference (@Hong Kong) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SHIINA, Michi
2. 発表標題 Diachronic Change in Preference of Japanese Benefactives: Shift from 'sase-te-kudasaru' to 'sase-te-itadaku'(In a panel: Diachrony of politeness in East Asia in modern times, organized by Masato Takiura and Michi Shiina)
3. 学会等名 16th International Pragmatics Conference (@Hong Kong) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 滝浦真人
2. 発表標題 遠近と東西の交差点（シンポジウム「近代・英語・ポライトネス－近代社会で（イン）ポライトに生きること－」）
3. 学会等名 近代英語協会 第36回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 椎名美智
2. 発表標題 インポライトネス インポライトネス（シンポジウム「近代・英語・ポライトネス－近代社会で（イン）ポライトに生きること－」）
3. 学会等名 近代英語協会 第36回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 滝浦真人
2. 発表標題 敬語とベネファクティブの近代（シンポジウム「敬語とは何か 敬語表現の諸相」）
3. 学会等名 青山学院大学日本文学会主催 国際シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masato Takiura
2. 発表標題 Diachrony of politeness in East Asia in modern times
3. 学会等名 International Pragmatics Association Conference 2019（予定）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Michi Shiina
2. 発表標題 Diachronic Change of Japanese Benefactives: Shift from 'sase-te-kudasaru' to 'sas-te-itadaku'
3. 学会等名 International Pragmatics Association Conference 2019 (予定) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 滝浦真人
2. 発表標題 この地でポライトネスを考えることの意味を考える
3. 学会等名 HLC講演会, 2019年1月27日, 杏林大学外国語学部 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 滝浦真人
2. 発表標題 ポライトネスの原理・原則と日本語: ベネファクティブと敬意漸減
3. 学会等名 ベネファクティブとポライトネス研究集会, 2019年3月11日, 法政大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 椎名美智
2. 発表標題 『サザエさん』に見る(イン)ポライトネスの歴史語用論研究: 授受動詞に着目した語用論的文体論
3. 学会等名 ベネファクティブとポライトネス研究集会, 2019年3月11日, 法政大学
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 椎名美智・滝浦真人	4. 発行年 2022年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 327
3. 書名 「させていただく」大研究	

1. 著者名 椎名美智	4. 発行年 2022年
2. 出版社 KADOKAWA	5. 総ページ数 224
3. 書名 「させていただく」の使い方	

1. 著者名 椎名美智	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 289
3. 書名 「させていただく」の語用論 人はなぜ使いたくなるのか	

1. 著者名 ジョナサン・カルペパー、マイケル・ホー共著；椎名美智監訳、加藤重広、滝浦真人、東泉裕子訳	4. 発行年 2020年
2. 出版社 研究社	5. 総ページ数 385
3. 書名 新しい語用論の世界 英語からのアプローチ	

1. 著者名 滝浦真人（滝浦真人編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 放送大学教育振興会	5. 総ページ数 264
3. 書名 日本語学入門（4/15章分担執筆）	

1. 著者名 滝浦真人、椎名美智（加藤重広・澤田淳編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 研究社	5. 総ページ数 281
3. 書名 はじめての語用論（第4章「対人語用論」、第12章「歴史語用論」各分担執筆）	

1. 著者名 加藤重広・滝浦真人編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 308
3. 書名 日本語語用論フォーラム3	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	椎名 美智 (Shiina Michi) (20153405)	法政大学・文学部・教授 (32675)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------